



村瀬理紀



未来を読むことが難しい時代に、親が子に身につけてほしいと願うのは、変化に対応し自分の力で生き抜く力ではないだろうか。今、求められているのは独自の教育で生徒の可能性を伸ばす学校だ。新時代をリードする「シン・名門校」を探る。1回目は、芝浦工業大学柏中学高等学校を訪ねた。

芝浦工大柏は「全員が主役、全員が伸びる」クラス戦略とキャリア教育

なぜ「探究」にこだわるのか？

白衣に身を包んだ「小さな科学者」たちが電子顕微鏡を使って、植物のおしべとめしべの微細な構造に目を輝かせる。隣のテーブルでは、中学生と高校生が学年の垣根を越えてヤモリの観察に没頭している――。

ここは、芝浦工業大学柏中学高等学校（以下、芝柏）の理科室だ。

廊下はさながら、知の博覧会。物理実験のデータ解析から、「源氏物語」における夢の役割」といった人文学研究までテーマは実に多彩。単なる調べ学習ではない。問いを立て、仮説を立て、検証し、考察する――本格的なものだ。

こうした探究活動に取り

組むのは、一部の生徒ではない。芝柏は「全員探究」を掲げ、生徒全員、一人一人が自らの興味と向き合い、「やりたいこと」を探していくのである。

むろん、最初からうまくいったわけではない。「やりたいこと」が最初から見つかっている生徒ばかりではないからだ。実際、全員探究を導入した際には「本当に皆が取り組めるのか」という不安の声もあったという。同校の中根正義校長（63）は、こう振り返る。

「世の中はどんどん変化しています。不確実な時代に、知識を常にアップデートし、自分で考えて主体的に生きていく力が必要です。やら

される探究では意味がない。自分のやりたいことを見つめられる探究でなければならぬのです」

筆者は全国の中学校・高校を研究している東大生だ。全国の学校を訪ね歩き、その学校ならではの文化や教育のあり方を調査している。

学校選びという点、入試偏差値や大学合格実績ばかりに目が向きがちだ。しかし、進路が多様化し、先行きの見えない現代、本当に重要なのは「学校自体の中身を見つけ、良さをを見つけること」ではないだろうか。

そうした問題意識から、東大で高校研究サー

クルを立ち上げ、現在60人を超える会員の会長を務めている。

学校の研究は奥が深い。歴史、地理、人口動態、行政、教育システム、行事、学校のシンボルまで、あらゆる要素が複雑

国公立大、海外トップ大への合格者が急増

10年前、芝柏は「GS（グローバル・サイエンス）」と呼ばれる選抜クラスを1

クラス設置した。それ以外のクラスは「GL（ジェネラルラーニング）」と位置づけられている。GS、GLクラスともに高校2年時から文系・理系に分かれる2段階のコース制を採用している。

普通の高校は、上位層の学力を伸ばす目的で「特進クラス」を置き、難関大学の合格者は特進クラスから合格する、というのがほとんどだ。では「GSクラス」はこのような特進クラスにあたるのか、というところ

に絡み合って「学校」は成立している。それらを深め、広めていくことは片手間では不十分だ。そのため現在は休学し、研究活動に専念している。そんな筆者が芝柏の取材を通じて痛感したの

ではない。キャリア開発部長の宝田敏博教諭（59）はこう話す。

「生徒一人一人が持つ可能性を最大限に伸ばしてほしいという思いからGSを設け、このクラスは当初から必修で探究学習の時間を設けました。現在は全生徒に探究の時間を必修としました。すべての生徒に合わせた最適な授業を設計できるようにになったこと、これ何よりも大きな成果です」

高校から入学した生徒（高入生）の割合は、GS、GLクラスとも3割程度。高1の段階では、カリキュラム

は、生徒たちが皆「学問」に目を向けていることだ。なぜ芝柏ではそのような生徒が育つのか。全国の学校を見てきた筆者の目には、その背景にある芝柏ならではの教育環境が浮かび上がってきた。

の進度の違いがあるため、GLクラスは中学から入学した中入生を交ぜずに別クラスに。GSクラスは、多少の補習などで調整は行つが、基本的には1年生の段階から中入生と高入生を混合したクラス編成になっている。

東大などの超難関大に合格する生徒は中入生の方が多い傾向はあるが、高入生からトップ層へ食い込んでいく生徒も多いという。

具体的にどのようなカリキュラムの工夫があるのだろうか。実は、これまで実施していた「0限授業（早朝授業）」を廃止し、7限

の授業も時間内に終えるよう、時間割を改訂したという。文科省が23年ごろから警鐘を鳴らしている「カリキュラム・オーバーロード（学びの詰め込み過ぎ）※」を回避するためだという。

ただ授業時間を削減しただけではなく、ICTの活用や浮いた時間を生徒が自主的に使えるよう、放課後の実験室を開放する「サイエンス研究会」を立ち上げた。さらに、学外の留学説明会や高大連携プログラムへの参加を正規の単位として認定する「SSキャリア開発講座」なども新設。生徒自身が自らのキャリアに合わせて学びをカスタマイズしていくスタイルへシフトしたのだという。

ちなみに、大学合格をゴールとする「進路部」は、生き方や職業選択まで見据えるキャリア教育へと発想を転換し、「キャリア開発部」へ発展させた。

結果として芝柏は近年、大学合格実績を着実に伸ばしている。象徴的なのが東大合格者の増加だ。2025年度入試では過去最高の5人が合格し、26年度入試でも3人が東大の門をくぐった。東京科学大5人を含む旧帝大十一科（一橋大、東京科学大）合格者は16人、千葉大21人、筑波大10人など、国公立大合格者は過去最高の83人に達している。

今春の進学実績で目を引いたのが海外トップ大学への進学者数だ。ロンドン大UCL、メルボルン大、クイーンズランド大、ブリティッシュコロンビア大など世界的な評価を受ける大学に計6人が合格。世界大学ランキングで東京大と同等、あるいはそれ以上の評価を得る大学も含まれている。

こうした成果の中心を担うのが、5年前に設置された「国際部」だ。英語圏への短期留学プログラムの運営

※ゆとり教育が見直された後の2010年代ごろから、英語やICT、探究学習など新しい教育課程が相次いで加わり、全国の学校現場で深刻化している



観葉植物に囲まれた新カフェテリアで学習に取り組む生徒たち

をはじめ、毎回100人を超える生徒・保護者が参加する海外大進学説明会を開催するなど、国際交流と海外進学支援を積極的に推進している。教員が外部奨学金の情報を幅広く収集し、出願

大学名より「夢」を語る生徒たち

4月にリニューアルされたばかりのカフェテリアに足を運んだ。観葉植物が配置され、ソファ席や一人用の自習スペースなど、多様な座席が設けられ、生徒たち

書類の作成から面接対策まで一貫してサポート。今年度はJASSO（日本学生支援機構）をはじめとする給付型奨学金などで年間400万〜500万円規模の奨学金を取得した生徒もいた。

は思い思いの場所で学習している。カフェには現役大学生のメンターが常駐し、進路や学習、大学生活について相談することができる。

年齢の近い先輩との日常的な交流が将来を考えるきっかけとなっているのだろう。在校生にも話を聞いた。

生徒会長を務めるGSクラス3年生の植月悠真さんは、中学2年生の頃から「3次元ディスプレイを作りたい」という夢を抱き、探究活動で光工学を研究してきた。レンズや凹面鏡を用いた装置の研究に取り組み、今年4月タイで開催された

国際フォーラムに参加。アジア各国の高校生が集まり、それぞれの研究成果を発表する場である。成果は国際シンポジウムでも高い評価を受けたという。

「先生方のサポートはかなりの手厚く、研究の進め方を体系的に示してくれます。国際的な学術発表の形式も意識して指導してくれるので、発表しやすかったです」（植月さん）

探究活動が学校全体に制度として根付いていることも刺激になっているという。「周囲の友人もそれぞれテーマを持って取り組んでいるので、分野を超えてアイデアをもらえることが多いです」（同）

興味深いのは、植月さんが入学当初から「物理一筋」の生徒だったわけではないことだ。英語部でディベート大会に出場し、生徒会活動や文化祭実行委員にも積極的に参加。その関心は幅

広く、さまざまな活動に打ち込んできた。その延長線上で、探究活動をきっかけに出合ったのが「光学」という分野だった。

「探究は本当に楽しい。どんなのめり込んでいける環境がありました」（同）

同じく3年生の坂井十和子さんは、前述の校内カフェテリアのリニューアル計画に関わった。食堂の長テーブルに椅子が並んでいるだけの空間を、生徒たちがのびのびと学習できる空間へと生まれ変わらせた。

幼少期から建築に関心があつたという坂井さんは、「学校の中に『サードプレイス』のような場所を作ってはどうかと提案し、観葉植物の配置なども反映してもらいました」と話す。

坂井さんは芝浦工業大建築学部への進学を希望し、大学入学後に単位履修が認められる高大連携制度を利用し、大学で開講されてい

る哲学や認知心理学の授業を受講している。

坂井さんはGLコースの生徒だ。まさに「全員探究」の良さが表れている事例だろう。

取材を通じて印象的だったのは、生徒たちに将来を尋ねると、返ってくるのは大学名でなく学問の名前だったことだ。「物理をやりたい」「建築を学びたい」「認知心理学に興味がある」……そんな言葉が自然に出てくる。もちろん、その先には東大や芝浦工大といった志望校がある。しかし順番が違うのだ。「〇〇大学に行きたいから」ではなく、「この学問を学びたいからこの大学」という発想なのだ。偏差値の高い大学に進めば安泰、という時代は終わってはいけないうのだ。むしろ大事なことは「何を学びたいのか」「社会とどう関わるのか」を定められるかどうかだ。